# 高校

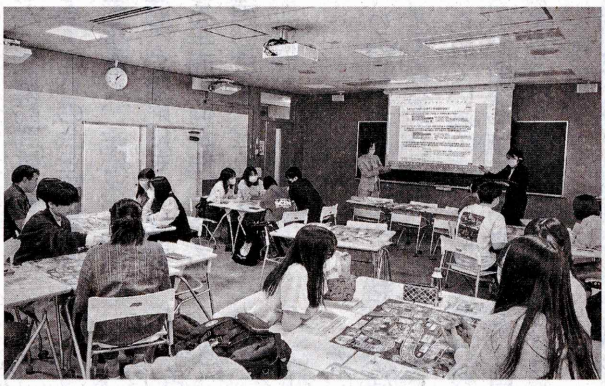
## 研究への扉 —— 大学ゼミめぐり ㉛

# 日常を俯瞰、生活の知恵学ぶ

## 武蔵大学 宇田川 敦史ゼミ ㊦

宇田川敦史准教授のゼミには、3年生が10人、4年生が18人在籍している。互いを尊重し、学び合う学生が多いという。ゼミに入ると、まずはメディアに関して自らの興味・関心の言語化に取り組む。そして似たような考えを持つ学生らでペアを組み、インタビューを実施。将来の進路も見据え、一人一人が研究テーマを絞り込んでいく。こうした取り組みにより、ゼミ生同士の仲がさらに深まり、自己分析力も向上。次第に領域ごと（SNS分析やアプリ制作など）に分かれ、グループが出来上がっていく。

その後、各グループで興味・関心に基づいた学術論文を探し、講読した内容をゼミ内で発表。このような学びを踏まえ、夏休みの間に学生一人一人が自らの卒論構想に着手する。研究テーマに見通しが立つと、データ収集や分析方法（主に社会調査系、メディア分析系、メディア・デザイン系の三つ）を検討。統計的手法は必要に応じ、個別に指導も行っているという。



外部講師を招き、メディアの理解を深める場も設定している

年度途中で企業訪問（本年度はIT企業で生成AIのプロンプトに触れた）や、外部講師を招いてメディアを用いた仕事の理解を深める機会なども設定。出版物とデジタル資料が集められた国立国会図書館には毎年必ず訪れているという。蓄積されたメディアの存在をどう捉えるべきかを大事にしているためだ。

卒論構想に関する探索は3年次で終え、4年次は完成を目指して執筆活動に専念する。ゼミがペースメーカーの役割を担い、学生一人一人の進捗（しんちょく）状況を把握する場になっている。これまで学生が取り組んだ卒論のテーマに、販売促進アプリ（バイト先）のプロモーションや詐欺メールに関する動画教材の開発などがある。

宇田川准教授が武蔵大学に着任して3年目を迎えた。本年度は初めて卒業生を輩出する。4年生の内定先は、コンテンツ制作や広告事業などに取り組むIT企業が多いという。進路に悩む高校生に対し、「大学は本で書いてある難しい知識を学ぶようなところと思っている生徒もいるかもしれない」と語る宇田川准教授。メディアの学びに関しては、「普段の日常生活を俯瞰（ふかん）でき、生活の知恵を学ぶこともできる」と話している。